

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長  
(福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課)

平成26年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

8月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病(葉いもち・穂いもち)	並	並	並
	セジロウンカ	少	やや少	やや多
	トビイロウンカ	並	やや少	少
	コブノメイガ	少	少	少
	斑点米カメムシ類	やや少	やや少	やや少
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	やや多
かんきつ	黒点病	少	やや少	多
	ミカンハダニ	少	少	並
なし	ナシヒメシンクイ	少	少	並
かき	炭疽病	やや少	並	並
	フジコナカイガラムシ	多	多	多
	ハマキムシ類	少	少	少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	多	—	やや多
茶	炭疽病	少	少	少
	カンザワハダニ	少	少	少
	チャノキイロアザミウマ	並	並	やや多
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多	やや多
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	並	並
	ハダニ	少	やや少	やや少

注：果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため、前年比としている。

<予想される向こう1か月の天候（平成26年8月2日～9月1日）>

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並か高く、2週目は平年並、3～4週目はほぼ平年並でしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

（福岡管区气象台 平成26年7月31日発表抜粋）

作物別発生予報

予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因であることを示します。

【普通作物—水稲】

普通期水稲

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

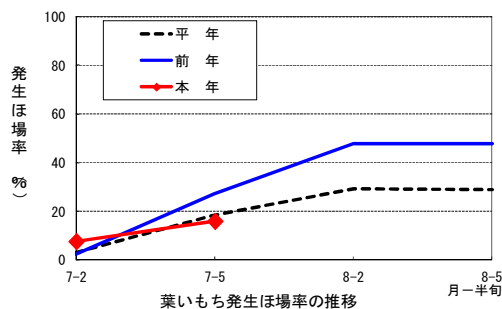
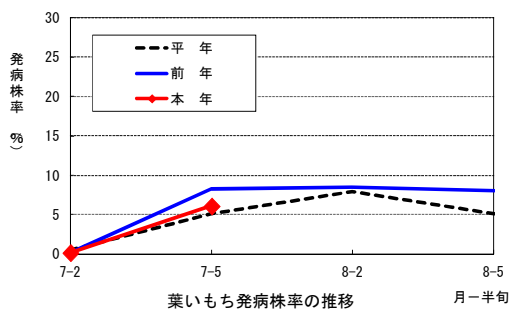
（2）予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった。

発病株率 6.1%（平年 5.1%、前年 8.3%）

発生ほ場率 16.0%（平年 18.4%、前年 27.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。



（3）防除上の注意

ア 発生状況は地域やほ場による差が大きく、発生株率が50%の多発ほ場が一部で認められており、地域やほ場によって発生状況が大きく異なっているため、必ず本田での発生状況を確認する。

特に、育苗期に本病が発生した地域では注意する。

イ 本病原菌は孢子形成量が非常に多く、病斑数が少ない場合でも大量の孢子が飛散する。このため、葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努める。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。粉剤は出穂期前、粒剤は出穂期2週間前に処理する。

エ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

オ 農薬の使用および散布等にあたっては、p12の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

## 2 セジロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 18.5頭

(平年 42.6頭、前年 8.8頭)

発生ほ場率 94.1% (平年 90.3%、前年 72.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

### (3) 防除上の注意

ア 飛来量は地域による差が大きく、主要飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。

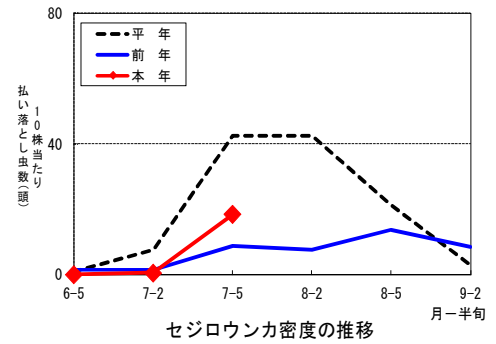
イ 幼穂形成期～穂揃期に多発生して吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少など、大きな被害が生じることがある。

発生状況を必ず確認して幼虫の発生密度が高い場合には、薬剤防除を実施する。

ウ 飼料用水稻では本種が増殖しやすいため、発生状況に注意する。

防除を実施する場合は、「稲発酵飼料生産・給与マニュアル」(稲発酵粗飼料推進協議会等編)、「多収米栽培マニュアル」(農林水産省)等に沿って行う。

エ 平成22年に本種によって媒介されるイネ南方黒すじ萎縮病の発生が確認されている(平成22年度 特殊報第3号 参照)ので注意する。



## 3 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

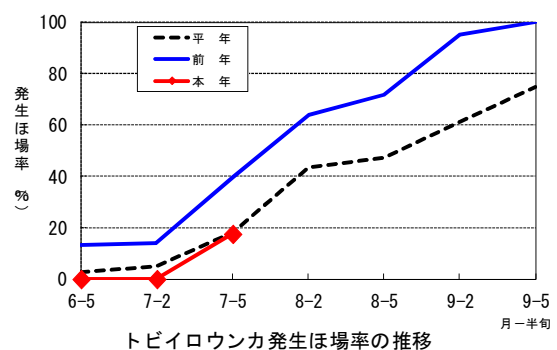
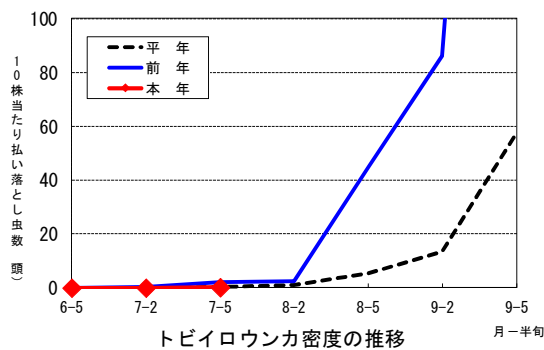
### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった。

10株当たり成幼虫数 0.16頭 (平年 0.46頭、前年 2.1頭)

発生ほ場率 17.6% (平年 18.0%、前年 39.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。



### (3) 防除上の注意

ア 飛来量は地域による差が大きく、飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。

イ 発生初期には低密度でも急激に増加するため、発生パターン図(平成26年度 技術情報第1号)を参考に、必ずほ場での発生状況を把握し、適期(若齢幼虫発生期)に防除を行う。

ウ 育苗箱薬剤が施用された場合でも、移植後1か月以上経過した水田においてはウンカ類が増殖しやすいので、十分注意する。

エ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。

オ 無人ヘリコプターによる防除を実施する場合は、気温が高くなる前の早朝や気温が下がった夕方に実施する。気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に蒸発して防除効果が著しく低下することがある。

**※要防除水準**

飛来後第1世代：100株当たり 20頭以上（7月下～8月上旬頃）  
 飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上（8月中～下旬頃）  
 飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上（9月）

**4 コブノメイガ**

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

食害株率 0%（平年 5.0%、前年 2.8%）

発生ほ場率 0%（平年 42.5%、前年 41.7%）

30㎡当たり払出し成虫数 0.2頭

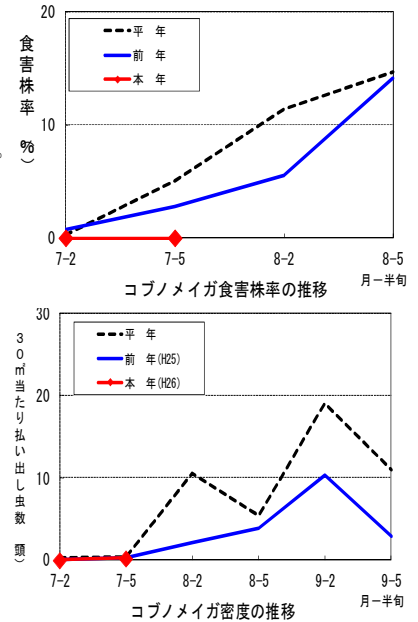
（平年 0.4頭、前年 0.3頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

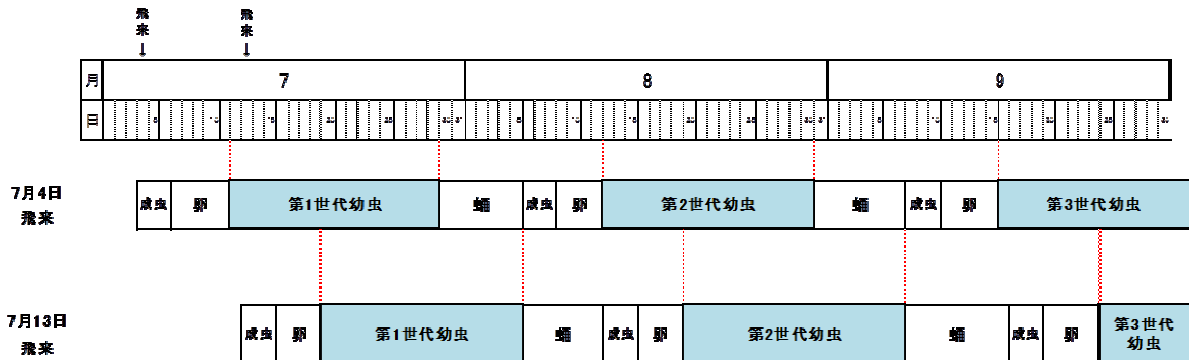
(3) 防除上の注意

ア 防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。

イ 本種はウンカ類と同時期に飛来していると考えられるので、下記発生パターン図を参考に防除を行う。



飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図（平成26年7月24日作成）



**5 斑点米カメムシ類**

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 県下5か所の予察灯における、7月1半旬～5半旬までのミナミアオカメムシの誘殺虫数は平年並であった。

主要3種カメムシの誘殺虫数は平年よりやや少なかった（－）。

アカスジカスミカメの誘殺虫数は平年より少なかった（－）。

ミナミアオカメムシ 58頭（平年 49頭、前年 109頭）

主要3種カメムシ<クハラカメムシ、ホソカメムシ、シロカメムシ> 9頭

（平年 15頭、前年 9頭）

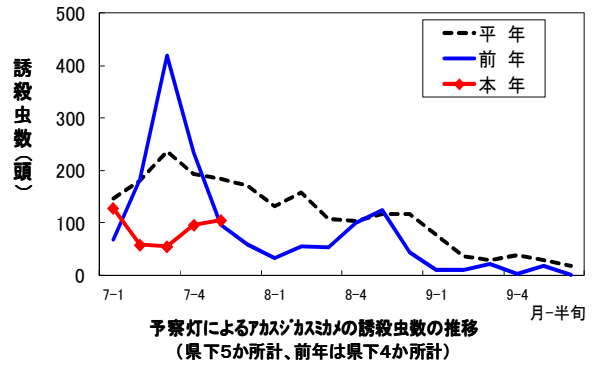
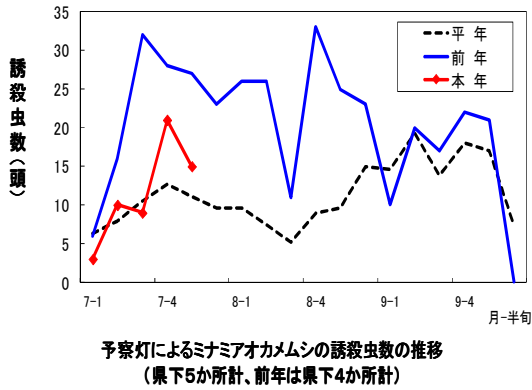
アカスジカスミカメ 442頭（平年 938頭、前年 996頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

(3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田などの草刈を徹底し、出穂期2週間前までに終了する。

- イ 防除時期は穂揃い7～10日後の1回を基本とする。
- ウ 出穂期の早いほ場では集中的に加害される恐れがあるため、発生状況に注意する。



**【普通作物：大豆】**

**1 ハスモンヨトウ**

(1) 予報の内容

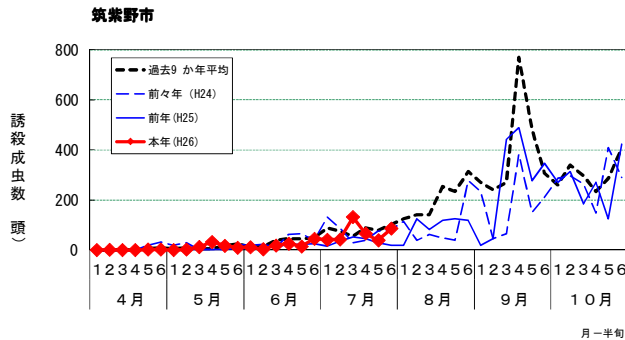
発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月1半月～5半月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年（過去9か年平均）並であった。

筑紫野市 320頭（平年：385頭、前年：175頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。



(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。

ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を、必ず確認する。

**【果樹：かんきつ】**

**1 黒点病**

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より多

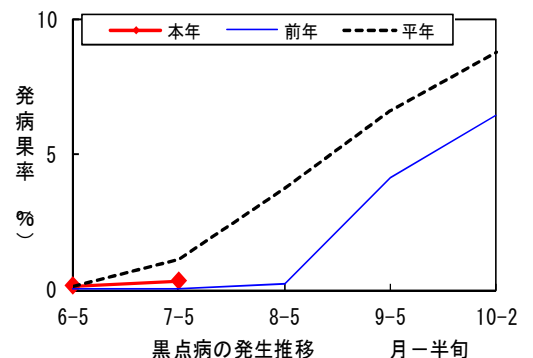
(2) 予報の根拠

ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病果率 0.3%（平年 1.1%、前年 0.0%）

発生ほ場率 18.2%（平年 33.8%、前年 8.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高



く、降水量は平年並か多いとされている (+)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる枯れ枝は除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 前回の散布から1か月後、又は積算降水量250mmを目安に防除を実施する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 12の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

## 2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 8.1% (平年 14.8%、前年 15.9%)

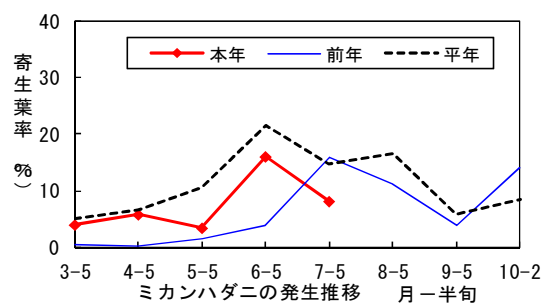
発生ほ場率 63.6% (平年 64.5%、前年 58.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【果樹：なし】

### 1 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～5半旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年より少なかった(-)。

誘殺数 8頭 (平年 61頭、前年 6頭)

イ 7月5半旬調査の結果、被害果率は平年並であった。

被害果率 0.2% (平年 0.3%、前年 0.2%)

発生ほ場率 18.2% (平年 16.4%、前年 8.3%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

(3) 防除上の注意

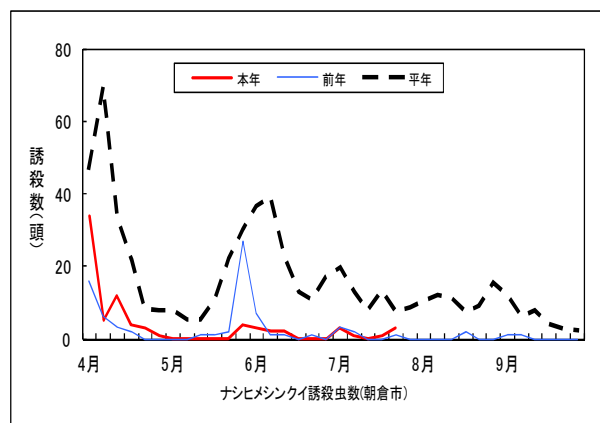
ア 8月上～中旬頃の発蛾最盛期に防除を行う。

防除後も成虫が多く見られる場合は、7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食入加害するので、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 早生種は収穫期に入るので、防除の際は農薬使用基準を遵守する。

エ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



## 【果樹：かき】

### 1 炭疽病

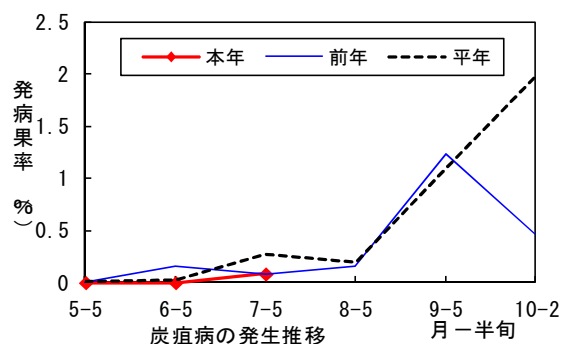
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病枝率 0% (平年 0.5%、前年 0%)





発生ほ場率 0% (平年 24.2%、前年 0%)  
 発病果率 0.1% (平年 0.3%、前年 0.1%)  
 発生ほ場率 8.3% (平年 17.4%、前年 7.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(+).

(3) 防除上の注意

- ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去する。
- イ 台風等の強風雨が予想される場合や発病が多い園、本病に弱い品種（早秋）では、薬剤防除を徹底する。

## 2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

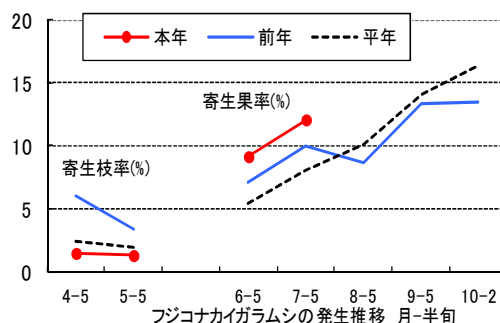
ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+).

寄生果率 12.1% (平年 8.1%、前年 9.9%)  
 発生ほ場率 91.7% (平年 81.5%、前年 100%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

(3) 防除上の注意

- ア 薬剤防除の効果が最も高いのは若齢幼虫期であるが、第2世代以降は齢期が乱れているので、園内をよく観察して適期防除を実施する。
- イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないように丁寧に薬剤散布を行う。
- ウ 薬剤散布にあたっては、できるだけ天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



## 3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

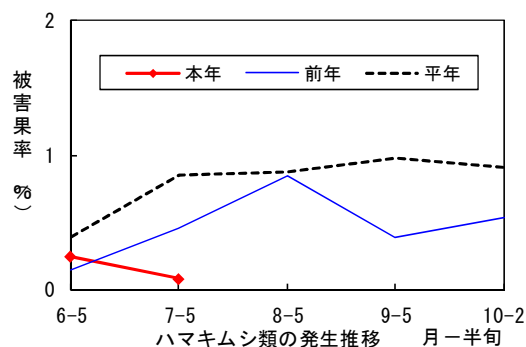
ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(-).

被害果率 0.1% (平年 0.9%、前年 0.5%)  
 発生ほ場率 8.3% (平年 37.9%、前年 23.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

(3) 防除上の注意

防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



### 【果樹：共通】

#### 1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多、前々年並

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの越冬量は、前年より多かった（前年比：+）。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成 26 年 (本年)	平成 25 年 (前年)	平成 24 年 (前々年)	平成 14 年 (多発年)
越冬量 (頭/m <sup>2</sup> )	4.8	0.7	3.2	4.6
ヒノキ球果着生量	中	中	少	中

イ 7月5半旬における県下12か所のヒノキ球果のピーティング調査の結果、チャバネアオカメムシの1地点当たりの寄生虫数は、成虫、幼虫ともに前年よりやや多かった（前年比：+）。

寄生成虫数 6.5頭（前年1.0頭、前々年 4.1頭）

寄生幼虫数 5.0頭（前年2.2頭、前々年 4.2頭）

ウ 7月1半旬～4半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年より多かった（前年比：+）。

＜調査地点：久留米市＞

125頭（前年 32頭、前々年 232頭）

＜調査地点：朝倉市＞

88頭（前年 1頭、前々年 238頭）

＜調査地点：八女市＞

70頭（前年 11頭、前々年 309頭）

エ 7月1半旬～4半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年より多かった（前年比：+）。

＜調査地点：筑紫野市吉木＞

10,030頭（前年 14頭、前々年 7,388頭）

オ 7月5半旬調査の結果、被害果は前年よりやや多かった（前年比：+）。

なしの被害果率 0.3%（前年0%、前々年 0.3%）

かきの被害果率 0%（前年0%、前々年 0.1%）

カ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

### (3) 防除上の注意

平成26年7月23日26農林試第3586号技術情報第2号参照。

## 【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ナシ ハダニ類	やや少	やや少	やや多	・多発生すると防除が困難になるので、低密度のうちに防除を徹底する。
カキ うどんこ病	多	やや多	やや多	・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
カキノヘタムシ ガ	多	多	多	・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。

## 【茶】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

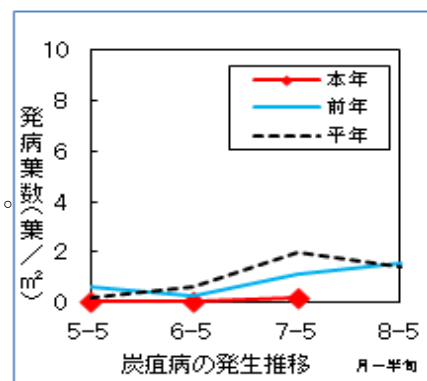
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病葉数 0.2葉（平年2.0葉、前年1.1葉）

発生ほ場率 16.7%（平年30.0%、前年46.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている（+）。



(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

特に、最終摘採後の新芽（秋芽）に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前に防除を行う。



ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 1 2 の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

## 2 カンザワハダニ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生葉率 0%（平年 0.4%、前年 0.5%）

50葉当虫数 0頭（平年 0.6頭、前年 1.5頭）

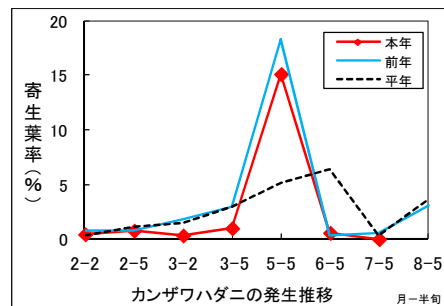
発生ほ場率 0%（平年 10.1%、前年 13.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

### (3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 3 チャノキイロアザミウマ

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった。

たたき落とし虫数 3.8頭（平年 4.2頭、前年 2.3頭）

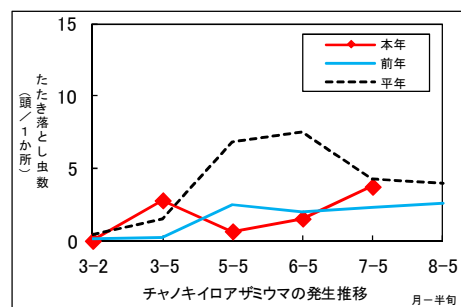
発生ほ場率 83.3%（平年 77.7%、前年 68.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

### (3) 防除上の注意

ア たたき落とし（B 5 版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除を行う。



## 4 チャノミドリヒメヨコバイ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

たたき落とし虫数 0.9頭（平年 0.7頭、前年 0.4頭）

発生ほ場率 83.3%（平年 53.5%、前年 75.0%）

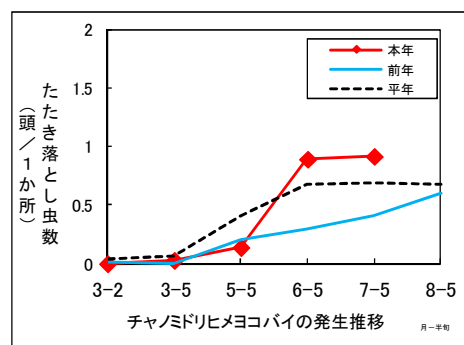
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている。

### (3) 防除上の注意

ア たたき落とし（B 5 版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

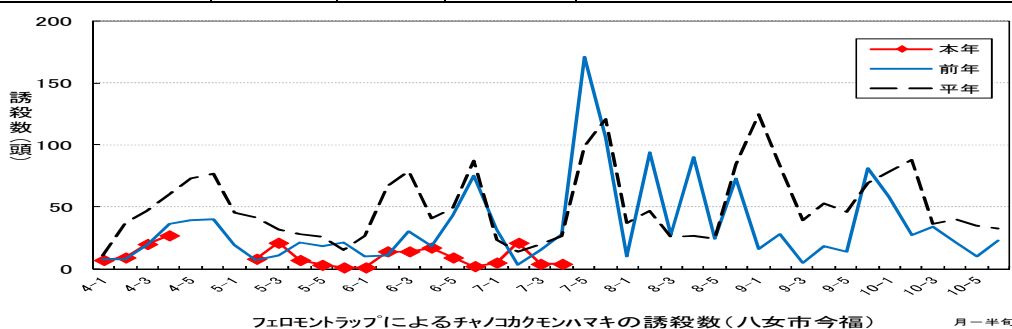
イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 多発後は防除効果が劣るので、多発する前に防除を行う。



## 【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
チャノコカクモンハマキ	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。</li> <li>・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。</li> </ul>
チャノホソガ	並	並	やや多	
チャトゲコナジラミ	少	—	少	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防除適期は若齢幼虫期で（年3～4回発生）、第2世代幼虫の防除適期は、8月下旬以降と予想される。</li> <li>・虫の発生が確認できない園でも、寄生している可能性が高いので防除を行う。</li> <li>・幼虫は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏に十分にかかるよう丁寧に散布する。</li> </ul>



## 【野菜：冬春イチゴ】

### 1 炭疽病（育苗期）

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

以下平成26年7月30日26農林試第3736号技術情報第3号参照。

### 2 ハダニ類（育苗期）

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年やや少

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生株率1.7%（平年9.5%、前年12.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

降水量は平年並か多いとされている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

イ ほ場内や周辺の草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

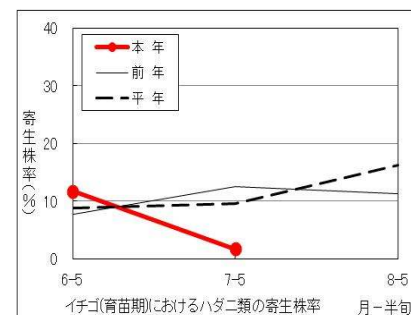
ウ 葉裏に農薬が付着するよう、下葉かぎ後に防除を行う。

エ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

オ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。

カ 夜冷短日や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、ハダニを持ち込まないようにする。

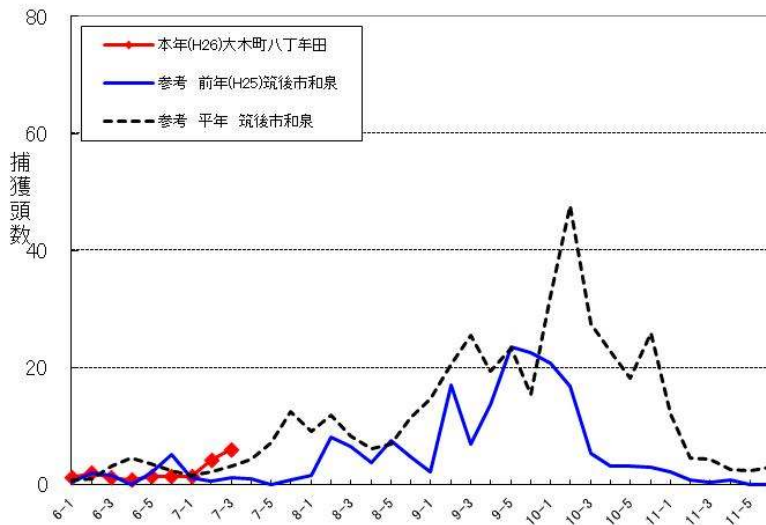
キ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p12の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



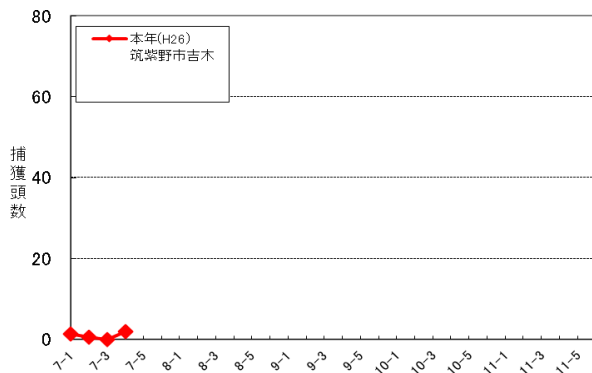
【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 コナジラミ類	やや多	やや多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野外（大木町）に設置したトマト苗トラップによる捕獲数は平年（筑後市）よりやや多かった。</li> <li>・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。</li> </ul>

平年・前年は筑後市での調査データとの比較。



トマト苗トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移(筑後地区) 月-半旬



トマト苗トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移(筑後野市吉木(試験場内)) 月-半旬

# 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

## 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

## 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

## 3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

## 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

## 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

## 6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。